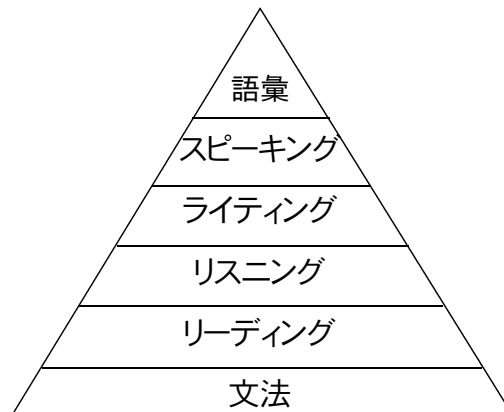


志緒野マリ著「今度こそ本気で英語をモノにしたい人の最短学習法—通訳ガイドの実践アドバイス—」祥伝社黄金文庫、祥伝社 2006年10月25日刊を読む

1に文法、2に語彙—英語学習のピラミッド—積み上げ学習法ほど、あとでよく効く

・基礎ががっちりしていないとダメ

英語学習がどういうパーツで出来上がっているか、ピラミッドを作ってみた。



第1段＝文法

大人が外国語を学ぼうとする場合、文法は不可欠である。まず文法によって、日本語と英語の文の成り立ちの違いを、論理的に理解する必要がある。基礎文法をモノにすれば、その後の英語学習にささげる総エネルギーはうんと節約できる。

第2段＝リーディング

文法の学習と並行して、リーディングを始める。これは、正しい英文に接することで、学びつつある文法が、実際の英文にどう反映されているかを知って、英文の成り立ちを理解するためである。

第3段＝リスニング

次に、視覚的にとらえてきた英文を、今度は耳にすることで、英語の音声をインプットしていく。もっとも単語を覚える時に、発音とアクセント記号をきちんと頭に入れておけば、初めて聞く音でも十分に理解できる。

第4段＝ライティング

ライティングは、辞書をひきひき、じっくりと考えるアウトプット作業である。入門の文法やリーディングと並行して、習ったばかりの文を、日本語から英語に書き換える練習をするという。英作して書いていくことで、文法の詳細がちゃんと理解できているかどうか、チェックできる。

第5段＝スピーキング

自力で英文を作り出して(どこかの暗記本から借用してくるのではなく)スピーキングするためには、ひと通りの「文法」と、言いたい内容に含まれている「語彙」を、辞書やノートを見ることなしにアウトプットする力が必要である。巷の英語本の大半を占める「英語らしい表現集」などは、それを実際に使うケースに滅多に遭遇しないから、じつは無駄が多いやり方である。それよりも、自分が言いたいことを、ひとつずつ組み立てていく力をつけることが、遠まわりに見えて、じつは近道だと知ってほしい。

第6段＝語彙

言いたいことを英文に即興で置き換える力がついたなら、後は語彙量の勝負になる。あなたが英語で関わる分野の語彙を増やせば、会話できる分野が広がる。通訳の仕事をする時などは、その日の仕事で必要となるだろう単語を詰めこんでいくことで、なんとかこなすことも多い。

・なぜピラミッドか

(1)文法、リーディング、リスニングの基礎インプットができていれば、スピーキングはせずとも、英語の力はサナギの状態で育っている。そして将来、「英語を話す」必要が生じた時に、少し集中的に訓練すれば、スムーズにアウトプットできるようになる。机の上で、本や辞書を活用して得た論理的な知識は、定着力が強い。私はいつも、大学の言語専門の先生方が、日常的にほとんどプラクティスする機会がないのに、堅固な知識を保持していて、必要な時には、すこぶる正しく話されることに感心する。冷凍食品と同じで、ちょっと鮮度に欠ける場合があるかもしれないが、「頭」で学んだ言語は、保持期間が長いのが特徴だ。

(2)これに対して、基礎固めを手抜きして、ピラミッドの底辺部分を形成しないままに、オーラル的なアウトプット訓練に飛ぶと、使い続ける間は、そこそこうまく行くが、使わない時期がつづく^{きび}と、錆つくのが早い。2年留学しても、帰国後3年使わずにいれば、ほとんど無^きに帰す。「身体」で覚えたものは、毎日使わないと、すぐに忘れ去るのだ。また、文法力が弱いと、ピラミッドの底辺が短いために、到達できる英語力の高さには限界ができる。

(3)大切なのは、自分が何のために、どんな英語を学ぼうとしているのか、クリアなビジョンをもつことだ。通訳や翻訳など、英語を専門とする職業につくのか、ビジネスマンが駐在を命ぜられて、とにかく業務をこなせるようにツールとしての英語を鍛えるのか、旅行の時にちょっと話したいレベルなのか、まったくの趣味なのか。そこを見極めずに、闇雲にあれこれトライしても、徒労に終わることになる。

2. 麻薬度の高い学習法は要注意

・損をしない学習法を

ネイティブの先生は、よくこう言う。

「日本の英語教育は間違っている。もっと楽しくやればいいのに、学校英語があまりに面白くないから、英語嫌いを作りだしてしまう」と。

楽しい授業をすることは、そう難しいことではない。楽しい授業、つまりゲームをしたり、歌ったり、小道具を使ったり、ビデオや写真などの視聴覚教材を使ったりして、教えこむ内容を少なくして、頭脳に負荷をかけない内容にすれば、生徒たちは苦しむことなく、楽しみながら英語を学ぶことができる。しかし、「負荷が軽い」ということは「進歩の量もまた少ない」といえる。

個人的には、ガイド試験の受験時代は、お金も時間もなく、一刻も早く英語力をつけたいと切実に思っていたから、中身の薄い授業には怒りを覚えた貧乏性の私なので、自分が教える立場の時も、つい盛り沢山にしてしまう。だから英会話学校では、「伸びたい派」の生徒の評判はよかったが、「趣味派」の生徒のアンケートでは不評だった。

ボスからしぼられて、仕方なく「お客様」のニーズに合わせて、教える内容の2割カットを心がけたら、アンケートの評価がぐんとよくなった。で、知ったのだ、英会話学校に通う大半の生徒さんは、「伸びたく」ないのだと。

「楽々と」「楽しく」続ける教材は、じつは「なかなか伸びない」のだ。

正直にいうと、私のような大阪のオバチャンは、こういう「じわじわ」が性に合わない。大阪のオバチャンは、「お値打ち」「お買い得」「コストパフォーマンス」「一挙両得」などという言葉に本能的に反応する。そして、払った本代や授業料は、なんとしても「元を取ろう」とする。自分がささげた時間量や費用に見合う知識や能力が身につかない場合は、明らかに「損した」気分になる。

しかし最近、書店で本をパラパラとめくると、大阪のオバチャンの神経を逆なでするような本が増えた。まず「字が大きい」から、ページあたりに書かれた「知識量」が少ない。「絵が多い」から「中身がスカスカ」。そして文章を読めば分かるはずのことが、どでかい図解によって、作り手の言葉を借りると「分かりやすく」表示

<コメント>

通訳ガイドの志緒野マリ氏による英語学習の基本は大賛成だ。積み上げ学習法ほど役に立つものはない。1 に文法、2 に語彙とよく言われているが、その間にリーディング、リスニング、ライティング、スピーキングの4技能をはさみこんでいるのが素晴らしい。是非、今日から実行を。

— 2016年9月2日(金) 林 明夫記 —